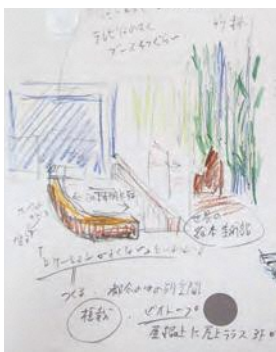


THE GALLERY



いわき市立美術館の普及事業 その9

美術館をデザインするワークショップ

この夏、企画展「サラ・ベルナルの世界」の関連事業として、女優であると同時に自分の劇団と劇場を持ち、プロデューサー、デザイナーとしても才能をも発揮したサラに因み、ワークショップ「デザインワークを体験してみよう！」を開催しました。

「デザインする」ってどういうこと。「デザイナーの仕事」ってどういう仕事。二日間の日程の冒頭、*ファシリテーターとなったデザイナーの清水淳子さんは、自分の体験談と簡単なワークを交えながら、生活の中で何気なく使っている「デザイン」という言葉の真相を分かりやすく紐解いてくれました。

プログラムの中盤には、自分を紹介する名刺代わりの絵を描いて発表（名刺交換?）、小学3年生から50代まで、年齢も様々な即席デザイナーが誕生しました。そんな17人のデザイナーのもとに舞い込んだ仕事は、「いわき市立美術館をもっと楽しくする仕組みのデザイン」。今回の依頼のミソは「“仕組み”を考える」というところです。美術館の目的、その目的を達成するための機能をデザインする。これには建築や什器デザインなどのハード面から、

活動の内容や人の動きなどのソフト面におよぶ大きな視野が必要となります。

もともと美術（美術館）好きの17人にとって、この難題は萌えるテーマとなったようです。チームを組んで進められたデザインワーク。一人ひとりが理想の美術館について語り、具体的なアイデアを出し合う過程はとても活発で、練り上げたデザインをプレゼンテーションするデザイナーたちの表情はどれも楽しげでした。

美術館とアリオスを繋ぐ中央公園に着目し美術館の周辺環境にまで思いを馳せたデザインや、「みる」、「つくる」、「まなぶ」、「語り合う」ことで美術館を「思考の宇宙」にしようとするデザインなど美術館の全体像に迫るもの。また、地元アーティストによる限定パッケージ飲料の開発・販売、美術館を中心としたバス路線の設置などキラリと光るピンポイントのアイデアまで、美術館の運営に携わるわれわれにとっても有意義な時間となりました。

（普及係長 植田玲子）

*ファシリテーター：参加者の主体性を促しつつ、ワークショップを良い方向へと導く進行役

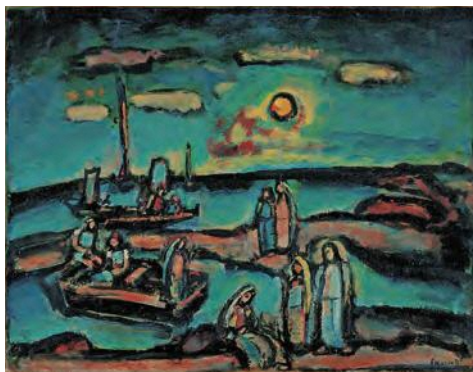
企画展紹介 パナソニック汐留美術館所蔵 ジョルジュ・ルオー展

9月14日(土)～10月27日(日)

ジョルジュ・ルオー (1871-1958) は、普仏戦争後のパリで、コミュニオンの蜂起と政府軍の鎮圧の混乱のさなかに生まれました。幼少期から芸術の才能を現し、ステンドグラス職人の徒弟を経て、19歳で美術学校に入学しました。そこでアカデミックな美術を学びますが、30歳を過ぎた頃から画風を一転させます。力強く骨太な黒い線と、自由な色使いを手段とし、娼婦、道化師、裁判官など様々な人間像を主題に選んだのです。当初から描いていたキリスト教の主題についても、人々の生活に寄り添うようなキリスト像や聖書の風景が登場したことが特徴的と言えるでしょう。二度の大戦を経験したルオーは、まさに激動の時代を生きた芸術家と言えますが、苦しみや愛情といった人間の普遍的な精神に心を寄せ続けました。

20世紀のヨーロッパでは、様々な新しい芸術運動が登場しました。ルオーについても、伝統的な芸術観を乗り越えようとする大きな流れの一人として捉えることができます。しかし、時代を冷静に見つめながら、黙々と自分の芸術を追求していった姿勢は、ルオーを独特な存在たらしめています。

ルオーの作品は日本近代画壇に対しても影響を与え、親しまれてきました。黒を効果的に用いる手法は、墨の文化を持つ日本人の感性に通づるものがあったのかもしれませんが。



《キリストと漁夫たち》1947年頃



《マドレーヌ》1956年

いずれもパナソニック汐留美術館蔵

パナソニック汐留美術館は1997年よりルオー作品の収集を開始し、現在では約240点を数える、世界でも有数のルオー・コレクションを有しています。本展ではそのパナソニック汐留美術館から約100点のルオー作品をお借りし、ご紹介します。新たな表現技法の模索がうかがえる「初期・学生時代」、様々なモチーフの探求が見て取れる「ミセレーレ、サーカス、裁判官」、「キリスト・聖書の世界」、そして「晩年・色彩の開花-悪の華、花、マドレーヌ」という4つのテーマを設けています。師ギュスターヴ・モローの影響が表れた繊細な初期作品《ゲッセマニ》(1893年)から、溢れる色彩が美しい晩年の《マドレーヌ》(1956年)まで、ルオーの魅力が余すところなくお楽しみいただけるでしょう。

(学芸員 太田紋乃)

企画展紹介 ニュー・アート・シーン・イン・いわき 菅野博子展

9月7日(土)～10月20日(日) 会場 美術館1階ロビー 観覧無料

いわきのアートシーンに新しい風を呼びこむ「ニューアートシーン・イン・いわき」シリーズ。平成3年から始め、45回目となる今回は、菅野博子を取り上げます。

1963年いわき市生まれの菅野は、都留文科大学卒業後、福島県で小学校教諭を6年間務めます。その後、絵画に



《ハルコさんNo.6》2011年



《アトリエのミィ〜》2019年

本格的に取り組むため、多摩美術大学二部デザイン学科およびゼツ・モードセミナーで学び、卒業後はイラストレーターとして依頼を受けたイラストや絵本の絵を手掛けるほか、身近な人物や猫などをモチーフに絵を描いています。

物事をシンプルな作風で的確に伝える技術を磨いた彼女の作品は、内容が理解しやすいとともに、人となりなど内面的な世界を深く捉えています。また、色彩や構成感覚にすぐれた絵は、独特の味や詩情を醸し出し、造形作品として魅力的なものになっています。

今回の展覧会では新作を含めたこの10年ほどの約60点の作品で、菅野博子の絵画世界を紹介します。

なお、同時会期で、アリオスカフェ(10時～17時、休・火曜日)で菅野博子展が開催されます。これは、いわきアリオスと美術館との連携事業で、こちらでは映画を題材とした作品が展示されます。こちらの方も一緒にお楽しみください。

(副館長 杉浦友治)

11月9日(土)～12月15日(日)

岐阜県高山市の光ミュージアムには、国内有数の420点を超える肉筆浮世絵が所蔵されていますが、その全体像は今日まで一挙に公開される機会を得ず、秘蔵のコレクションと言われてきました。長年にわたり浮世絵研究の中でその価値の高さを確証し、本展覧会実現に取り組まれたのは、北斎研究の第一人者として知られる美術史家の永田生慈氏でしたが、志半ばで病に倒れ、実現目前で逝去されました。今回、永田氏とともにこのコレクションを研究されてきた美術史家の鈴木浩平氏が永田氏から監修を引き継がれ、鈴木氏のご尽力で、ここに美人画を中心とした111点もの見ごたえある作品を大々的にご紹介できる運びとなりました。

浮世絵のイメージといえば、江戸時代の革新的な技術発展により大量生産されて海外にまで流布した錦絵(多色摺木版画)が一般的ですが、彫師や摺師の手を介さず、絵師が絹地や和紙に直に絵筆をふるった一点ものの絵画作品のことを錦絵と区別して肉筆浮世絵と呼びます。それらは、絵師の技量が直接評価されることもあって、肉筆浮世絵だけを専門にする絵師ばかりでなく、多くの人気絵師たちが版下絵を描く傍ら、富裕層の依頼を受けて肉筆浮世絵を描いてきました。

宮川長春(1682～1752)は、肉筆浮世絵だけで一時代を築き、優れた弟子を輩出した技術、知識とも秀でた絵師です。絹地に描かれた《立ち美人》(図1)は、紅地に白梅と金色の笹の葉が描かれた艶やかな着物に身を

包んだふくよかな美人が優雅に振り返る姿を描いたもので、肉筆浮世絵の黄金時代を築いた重要な絵師の高い技量を堪能することができる逸品です。

今日でも人気の浮世絵師、葛飾北斎(1760～1849)や歌川広重(1797～1858)の珍しい肉筆の美人画を見ることができるのも本展の魅力。琵琶湖畔を歩き来した渡し舟で客引きをする都落ちした平家の女房たちの悲哀を描いた北斎の《浅妻舟》(図2)。栈橋を歩く芸妓が、頭上の雁の声に足を止め聞き入る姿を描いた広重の《月夜雁を聞く女》(図3)。いずれも紙に墨と淡彩で筆致軽やかに描かれていますが、錦絵の力強さとは違った淡い情趣を感じることができます。

人気絵師といえば、ゴッホが高く評価した絵師溪斎英泉(1791～1848)の《立ち美人》(図4)や近年人気が再燃している歌川国芳(1797～1861)の《縁台美人》(図5)、月岡芳年(1839～1892)の《桜下美人》(図6)など、個性的で独特な色香を漂わせる妖艶な美人像もファンには見逃せない作品です。

浮世絵の題材として好まれた遊女や歌舞伎役者、芸妓や町の評判娘などは、今日でいえば、テレビ、雑誌で人気の芸能人やアイドルたちに匹敵する憧れの存在でありファッションリーダーでもあります。それを身近に親しむことのできた浮世絵は、今日のグラビア誌やブロマイド、ポスターと同じ感覚で人々に楽しまれました。大量生産され安価で手に入れられる錦絵ではなく、多少贅沢しても自分好みの一点を絵師に依頼して描かせた唯一無二のものと考え、当時の人々にとって肉筆浮世絵の魅力と憧れはいかばかりだったかと思いを馳せることもできる展覧会でしょう。

(学芸員 柴田百合子)



1 宮川長春《立ち美人》(部分)



2 葛飾北斎《浅妻舟》(部分)



4 溪斎英泉《立ち美人》(部分)



5 歌川国芳《縁台美人》(部分)



3 歌川広重《月夜雁を聞く女》(部分)



6 月岡芳年《桜下美人》(部分)

展示室から



7月7日に閉幕した企画展「見て、考えて、表現して体験！いわ美」。アートプログラムの体験を通して現代アートの良さを味わってもらった新しい企画でしたが、いかがでしたか。入場者こそ1386人と見込数2100人に振るいませんでしたが、入場者以上の成果があった展覧会だったと感じています。

成果の一つは展示室での来館者の様子が今までとは変わった点です。中西夏之《コンパクト・オブジェ》をじっと見つめる親子、ホルスト・アンテス《家族》を前にいろいろと話し合う3人の家族、プログラムに夢中で取り組む子どもたちなど。ちょっと難しい展覧会だと入場後5分くらいで出口に来てしまう子どももいますが、作品をじっくり見て、考え、プログラム完成させるなど、主体的に取り組む子どもや大人の姿を展示室で多く見ることができました。

次に来館者の展示室滞在時間が長かったことと満足度



が高かった点も成果です。子どもが多かったにもかかわらず平均滞在時間は2時間43分。最長は6時間03分でお昼も食わずに夢中で体験する10歳くらいの女の子もいました。アンケートでは、回答者の95%が「とてもよい」「よい」と回答し、自由記述では、「子どもと一緒に楽しむことができた。」「家ではできないアート体験を楽しませることができた。」「また開催して欲しい。」といった親世代からのよい評価をたくさんいただきました。

さらに、今までの解説文を読んで作品を見る知識教授型の鑑賞方法の他に、アートプログラムの体験という新しい鑑賞方法を市民の皆さんに提案できた点も成果です。

プログラムの改善など課題もありますが、市民の皆さんに当館の現代アートを楽しんでもらえる展覧会なので、機会があれば「体験！いわ美」をまた開催したいなと個人的に感じています。（主任学芸員 江尻英貴）

裏方だより

当館では開館以来、年度ごとに一年間の活動を報告する『年報』を制作しています。常設展、企画展の概要や出品作品のリスト、また展覧会に伴う講演会やコンサート、アートキャラバン（移動美術館）といった普及活動の実施リスト、あるいは新収蔵作品のリストといった情報を70頁程の冊子にまとめ、発行しています。現在、昨年度にあたる平成30年度の年報を制作中です。私は学芸



員及び職員からの原稿を取りまとめ、印刷会社への入稿、校正のやりとり等を担当しています。

しかしながら、私は今年4月に学芸員としてのキャリアを当館でスタートさせたばかり。当館の昨年度の活動の詳細を、この年報制作の作業を通じて初めて深く知ることとなりました。昨年度はおろか、過去30年余りの当館の活動も詳細には知りませんでした。しかしそんな時、過去30年分の年報の頁を繰ることで、当館の歴史を振り返ることができます。

平成30年度の年報は令和元年秋に完成の予定です。一般配布はしておりませんが、美術館の図書室や市立図書館等で閲覧することができるほか、美術館ホームページにも掲載する予定です。活動を報告することは、市立美術館としてふさわしい活動ができているか、市民の皆様の目に供するという目的もあります。是非手にとってみていただきたく思います。（学芸員 徳永祐樹）



アントニー・ゴームリー《見ることを学んでいる》
1991年 鉛、ファイバーグラス

「彫刻」というとどんな作品を思い浮かべますか？広場や公園に建つ著名人の銅像？神社仏閣内に安置された仏神像？あるいは街なかの抽象的なモニュメント？それとも美術館の展示室内で台座に乗せられた作品？いずれにせよ、あなたはきっと、その彫刻のイメージを周囲の風景とともに思い出すのではないのでしょうか。置かれた場(空間)と深い関わりをもっていること、それが彫刻の大きな特徴といえるでしょう。

かつては決められたところに設置されその場を象徴する存在だった彫刻ですが、19世紀末頃になると、特別な場所ではなく現実的な場所のどこにでも置くことができる自立した作品が登場します。台座の上に乗せるという作品の見せ方自体も変化していき、まず床の上などに置かれるようになり、やがて壁にとりつけたり、吊るされたり、動いたりする作品が出現します。展示スタイルが自由になるとともに、古来主要なテーマだった人体をはじめとする再現的な彫刻から遠ざかり、形と形、物と物を組み合わせて構成するような作品が生まれ、同時に、ブロンズや木、石などの素材を一種類のみ使うのではなく、さまざまな素材を複数用いる作品も現れました。特定の場所と再現性から離れることによって構造そのものが変わった彫刻は、与えられた場所に属してその場を意味するのではなく、「もの」として存在し、置かれた場(空間)を変容させる性質をも有するようになっていったのです。

「彫刻との語らい」と題した今期の常設展では、彫刻のあり方について考え、彫刻がはらむ問題に向き合ってきた現代の作家たちの作品を紹介します。円柱状の大理石と銅線の網を組み合わせた長澤英俊の《ODYSSEUS》、



土谷武《水一循環するもの》1994年 軟鋼

薄い鉄板を熱して叩き伸ばして作られた土谷武の《水一循環するもの》などの大型作品を久しぶりに展示するほか、若林奮、アントニー・ゴームリー、黒川弘毅、鈴木実の作品をドローイングや版画もまじえて展示する予定です。素材もテーマも異なる多様な彫刻作品との対話をどうぞお楽しみください。

小企画展では、9月下旬から12月中旬まで「収蔵作家セクションVOL.2」として、中西夏之と村上友晴の作品を、12月下旬から3月までの「VOL.3」では、いわきゆかりの若松光一郎と鈴木新夫の作品を特集展示します。それぞれの作家を複数の作品によってじっくり検証する良い機会となるでしょう。(学芸係長 竹内啓子)

レクシオン—この1点 柄澤齊《肖像 VII シャルル・ボードレール》

「私は窓の手摺に近付いて、小さな花の鉢植を手にとり、男が建物の戸口の外にふたたび姿を現した時、その背負枠の後の縁めがけて、私の武器を垂直に落下させた。そして衝撃は男を転倒させ、そのかつぎ歩く貧弱な全財産は背中の下敷になって砕けてしまったが、それは雷撃を受けて破裂する水晶宮さながら、とどろく大音響を発した」(シャルル・ボードレール「無能なガラス屋」『ボードレール全詩集II』、阿部良雄訳、ちくま文庫、1998年、31頁)。

19世紀フランス最大の詩人にして文学・美術評論家、近代詩の創始者にしてシュルレアリストの先駆者でもあったシャルル・ボードレール(1821-1867)は、詩によって描出した哀れなガラス屋に対する悪行が成就する瞬間を、彼が耽溺した現代生活における倦怠と享楽を、そして自らが切り拓いた散文詩の文学的可能性を、砕け散るガラスの只中、冷徹かつ熱狂を内に秘めた眼差しで見据えている。この木版画は詩人の「肖像」である。

柄澤齊は1950年栃木県日光市に生まれた。70年に版画家、日和崎尊夫(1941-1992)の個展に感化され、翌年、創形美術学校版画科に入学、木口木版の技法を日和崎に学ぶ。72年、日本版画家協会展に出品、以来、文学性に溢れる幻想世界を緻密に彫り出す木口木版を中心に制作、2002年には推理小説『ロンド』を発表、小説家としての一面をも持つ。

目の詰まった固い木材を輪切りにした断面(木口)を版材とし、直刻銅版画を彫る道具、ピュランを用いて凸版を彫り出す技法を木口木版という。18世紀に発明されたこの技法は、版木の剛性ゆえに活字と組んでプレスすることができるため、写真に取って代わられるまで、印刷物の挿絵として19世紀のヨーロッパで東の間の隆盛を迎えた。日本では、日和崎によって60年代に復興され、現代版画としての地位を得た。通常の木版に比べ、銅版画のような表現が可能になる木口木版とはいえ、柄澤の細密描写は極致に達している。

作家は80年代を通して《肖像》の連作に取り組み、主



《肖像 VII シャルル・ボードレール》
1983年、木口木版・紙、17.6×16.0cm

として西洋の偉大な文学者、芸術家、音楽家をモデルとして40点以上を制作した。偉人たちの作品や逸話を様々な解釈し、変容させ、肖像として表現したこの連作には、作家の文学、芸術への造詣の深さが遺憾なく発揮されているとともに、独特のユーモアと想像力が炸裂している。また作家は、書物の挿絵として発展した版画が、本質的に「言葉」と分かちがたい関係にあることを強く意識していた。そのことは、モデルとして文学者を選んだことのみならず、詩人との共作による詩画集という形式での作品発表や、小説家としての活動からも明らかである。作家は以下のように述べている。

「言葉に絵が導かれ、絵に言葉が触発されるスリリングな制作過程は、私達に知への新たな開示をもたらしてくれて倦むことがない。精選された紙質と印刷技術、念入りに仕上げられた造本の上で個々の仕事が一体となる時、詩は眼で見る版画であり、版画は眼で読む詩でもある」(柄澤齊「版画を読む」、『版画藝術』14巻53号、阿部出版、1986年、123頁)。

(学芸員 徳永祐樹)

今後の主な展覧会事業のご案内

※都合により、内容等に変更が生じる場合があります。

企画展

- ニューアートシーン・イン・いわき
菅野博子展
9月7日(土)～10月20日(日)
- パナソニック汐留美術館所蔵
ジョルジュ・ルオー展
9月14日(土)～10月27日(日)
- 光ミュージアム所蔵
美を競う 肉筆浮世絵の世界
11月9日(土)～12月15日(日)

- いわき市小・中学生版画展
令和2年1月5日(日)～1月26日(日)
- 第49回いわき市民美術展覧会
〈書の部〉
令和2年2月7日(金)～2月16日(日)
〈絵画・彫塑の部〉
令和2年2月21日(金)～3月1日(日)
〈陶芸の部、写真の部〉
令和2年3月6日(金)～3月15日(日)

常設展

- 彫刻の語らい
9月25日(水)～令和2年3月31日(火)
〈小企画展示I〉収蔵作家セレクションvol.2
9月25日(水)～12月22日(日)
〈小企画展示II〉収蔵作家セレクションvol.3
12月24日(火)～令和2年3月31日(火)